様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３１０９
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５９３４１４

研究課題名（和文）養護教諭が行う養護診断・対応のマニュアル開発と対応システム構築に関する研究

研究課題名（英文）A Study of the Development of Manual of Protective Care Diagnosis and Countermeasures by Yogo Teachers, and a Study of the Construction of its System

研究代表者
中村　恵子（Nakamura, Keiko）

新潟青陵大学・看護福祉心理学部・教授

研究者番号：１０４１０２５０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,500,000円、（間接経費）　750,000円

研究成果の概要（和文）：養護教諭を対象とした質問紙調査を実施し、どのように養護診断・対応を行っているのかを明らかにした。養護教諭やスクールカウンセラー、生徒指導主事への面接調査を実施し、心の健康問題における連携について分析、記述を行った。スクールソーシャルワーカー（SSW）に面接調査を行い、SSWによる支援について明らかにした。また、養護教諭へのグループインタビューをもとに、保健室来室者記録の改善を図った。さらに、各関係機関を訪問し、連携について調査した。アセスメント・シートや情報提供書を作成するとともに、健康相談活動の進め方や体制づくり、関係機関との連携などについて、研究成果としてまとめた。

研究成果の概要（英文）：This research clarified how yogo teachers diagnose and deal with students who need care on the basis of a questionnaire for the teachers. We analysed the methods of addressing psychological problems, focusing on the ways of cooperation, by conducting research by way of interviews with the yogo teachers, a school counsellor and a guidance director. In addition, we described the SSW support by way of conducting interviews with SSWs. Furthermore, we attempted to improve the records of students visiting health care rooms by conducting group interviews with yogo teachers, and visited organisations concerned and investigated the partnership between them. Through these attempts, we generated assessment sheets and a document for provision of information, and summarised the end result of research on the ways of proceeding with health care counselling activity, constructing its system and coordinating with institutions concerned.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学、地域・老年看護学

キーワード：学校看護　養護教諭　養護診断・対応　連携　心の健康問題

１．研究開始当初の背景

平成 20 年 1 月の中央審議会答申「子どもの心身の健康を守り、安全･安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について」において、養護教諭は、子どもの現代的な健康課題の解決に向けて重要な責務を担っており、その対応に当たり、学級担任等、学校医、学校歯科医、学校薬剤師、スクールカウンセラーなど学校内における連携、また医療機関者や福祉関係者など地域の関係機関との連携を推進することが必要になっている中、コーディネーターの役割を担う必要があることが示されている。その一方で、養護教諭については一人配置が多いことから、保健室来室者の増加や特別な配慮を必要とする子どもが多く、対応に苦慮している状況が見られることも述べられている。

また、平成 22 年 6 月に「教員の資質能力向上特別部会」が設置され、具体的な審議事項として、「2.新たな教員養成の在り方を踏まえ、教職生活の全体を通じて教員の資質能力の向上を保証するしくみの構築について」、「3.教育委員会や大学をはじめとする関係機関や地域社会との組織的･継続的な連携･協働のしくみづくりについて」を挙げている。

養護教諭が子どもの現代的課題の解決において重要な役割を果たすことができるようにするためには、養護診断･対応のプロセスや連携の在り方を明らかにし、養護教諭が適切な養護診断や対応を行うことを援助するしくみをつくることである。

２．研究の目的

・質問紙調査によって、養護教諭が行っている養護診断と対応の実態を明らかにするとともに、学校外の関係者との連携の現状と課題を探る。
・養護教諭やスクールカウンセラー、医療関係者や福祉関係者などに面接調査をし、子どもの健康課題における連携の在り方について考察する。
・養護教諭及び関係機関の専門家の意見に基づいて、養護教諭が実際の養護診断･対応時に活用できるマニュアルとチェックリストを開発し、連携における対応システムを構築する。
・子どもの現代的な健康課題の解決に向けた、学校や教育委員会、大学、関係機関との組織的・継続的な連携･協働のしくみの基盤をつくる。

３．研究の方法

(1)養護教諭と対象とした心の健康問題における養護診断・対応に関する質問紙調査

新潟県内の幼稚園、小学校、中学校、中等教育学校、高等学校、特別支援学校に勤務するすべての養護教諭 938 名を調査対象者として、平成 23 年 9～11 月に、心の健康問題における養護診断・対応に関する質問紙調査を実施した。対象者の勤務校へ無記名自記式の質問紙を郵送し、回収方法も郵送によるものとした。

(2)養護教諭、スクールカウンセラー、生徒指導主事を対象とした連携に関する面接調査

新潟市及び近隣の市町村に勤務する養護教諭 4 名、スクールカウンセラー1 名、生徒指導主事 1 名を対象者として、平成 24 年 8 月～25 年 3 月に、心の健康問題における連携について面接調査を実施した。事例についての逐語録をもとにカテゴリー化し、複線径路・等至性モデル（TEM）を用いて分析した。TEM 図の作成後、それぞれ 2 回目の面接を行い、分析結果の修正を行った。

(3)保健室来室者記録の改善に関する実践研究

新潟市内の小・中・高等学校に勤務する養護教諭 6 名を対象にして、平成 25 年 8 月に、ファシリテーションの手法を用いて、保健室来室者記録に関するグループインタビューを行った。(1)の質問紙調査の結果も踏まえて、保健室来室者記録を作成し、実際に 1 ヶ月使用してもらい、改善を図った。

(4)関係機関や専門家への連携に関する面接調査

教育委員会、教育相談所･教育支援センター、警察・少年サポートセンター、児童相談所、福祉事務所、発達障害者支援センター、保健所、精神保健福祉センターの関係機関に平成 25 年 8～9 月に訪問し、心の健康問題における連携について面接調査を行った。

また、スクールソーシャルワーカー（SSW）4 名に、平成 25 年 8、9 月に、小・中学生の問題行動への支援について面接調査を実施した。面接内容の逐語録から分析ワークシートを作成し、カテゴリーとサブカテゴリーを抽出し、事例の文脈にそって、カテゴリーを図にまとめた。SSW に 2 回目の面接をし、分析結果を修正した。

(5)健康相談活動の進め方、アセスメント・シート、情報提供書等の作成

これまでの研究成果をもとに、健康相談活動の進め方、アセスメント・シート、情報提供書等を作成した。作成にあたっては、連携研究者と複数で検討した。

また、研究成果等を著者としてまとめ、関係機関や専門家に意見を求め、加筆・修正を図った。

４．研究成果

(1)養護教諭を対象とした養護診断・対応に関する質問紙調査

新潟県内のすべての養護教諭を対象として、心の健康問題における養護診断・対応に

ついて質問紙調査を実施し、回答者数 651 人で、回収率は 69.4%であった。

調査目的は、子どもの保健室来室時における保健室来室者記録などの使用に関する実態や、養護診断・対応について明らかにすること、学校外の関係者との連携の現状と課題を探ることである。

保健室来室者記録などの使用に関する調査では、調査項目ごとに単純集計やクロス集計等を行い、自由記述回答については、類似する記述内容ごとに分類を行った(表 1 参照)。保健室来室者記録は、校種等により記載内容が異なり、多岐にわたることが明らかになった。約 4 割の養護教諭が、記録の改善を試みたいと感じていることも分かった。

表 1　保健室来室者記録で改善したい内容

大項目	小項目	主な内容	数
子どもの振り返りを促す		子どもが自分で記入し、自分で振り返りをさせる資料としたい	30
事務処理	統計処理しやすい	統計しやすいように改善したい	16
	記録として活用	項目を整理して、後に記録として活用できるものにしたい	8
項目の見直し	簡潔さ	簡潔明瞭なものにしたい	19
	子どもが記載できる	子どもが自分自身で書けるように、わかりやすくしたい	39
	項目の追加	具体的な項目を増やしたい	13
	詳細に書ける	もっと詳しい内容を記入し、個人の記録としたい	17
		項目の見直し	4
アセスメント	情報の集約	過去の状況をすぐに把握、情報としてすぐ見られるようにしたい	14
	生活習慣	生活習慣に起因する体調不良を詳しく把握できるものにしたい	4
	バイタルサイン	バイタルサインを記入する欄	6
心の健康		心の面がもう少し把握できる項目を盛り込みたい（相談の希望、有無）	13
養護診断		養護教諭の養護診断の欄等を加える	3
処置・対応		病気の記録。症状や対応が詳しく書けるものにしたい	8
評価		健康相談の対応がよかったのか、評価をする方法や欄	2
自己決定を促す		自分がどうしたいのかを記入できる欄を増やしたい	5
実態に合わせる		学校の特色に合わせて多少の変更が必要	7
連携		家庭、担任と連携を図れるものにしたい	10
その他		前任者の作成したもので、使い勝手が悪い	16

また、心の健康問題についての養護診断・対応に関する 30 項目について、欠損値を除いてデータを 602 とし、天井効果が見られた 10 項目を除外して分析した。回答を 4 段階尺度として点数化し、探索的因子分析を行って、「連携」「養護診断・対応」「子どもとの関わり」「専門性」「独自性」の 5 因子を抽出した（表 2 参照）。

表2　心の健康問題における養護診断・対応の質問項目の因子分析（最尤法、プロマックス回転）

因子		質問項目	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ
連携	［ルールの見直し］	子どもの状況から、ルールに合わない対応が必要な場合には、他の教職員と共通理解を図り、ルールの見直しを行っている。	.658	.180	.084	.115	-.010
	［キーパソンとの協力］	校内の支援体制づくりにおいて、問題解決の鍵となる教職員（キーパーソン）を見つけ、協力して対応するようにしている。	.536	.132	.283	.133	.076
	［対応の方針や対応策］	子どもが学級や学校に適応することができるように、対応の方針や対応策を決めている。	.529	.217	.271	.180	-.090
	［役割分担］	校内の支援体制において、教職員のそれぞれの役割を明確にし、役割分担して対応を行っている。	.527	.207	.150	.095	-.265
	［支援の見直し］	問題の見極め（アセスメント）によって、これまでの支援の見直しを行っている。	.514	.261	.163	.312	.018
	［提案の仕方の工夫］	他の教職員との間に、子どもの問題の捉え方の違いがある場合には、それぞれの立場や主体性を尊重し、情報提供や対応策の提案の仕方などを工夫している。	.503	.296	.135	.305	-.177
	［周りの子どもへの働きかけ］	子どもの心の健康問題において、周りの子どもへの働きかけを行っている。	.458	.234	.357	.128	-.019
	［保護者への働きかけ］	保護者に保健室における子どもの様子を伝え、保護者が子どもの問題と向き合えるように心がけている。	.409	.247	.304	.153	-.132
養護診断・対応	［対応の適切さ］	子どもの心の健康問題についての対応を適切に行っていると思う。	.217	.745	.209	.208	-.065
	［養護診断の適切さ］	子どもの心の健康問題についての養護診断を適切に行っていると思う。	.261	.609	-.006	.366	-.224
	［直感的な気づき］	保健室来室時に身体的な症状を訴えている場合でも、表情や保健室来室の時間帯などから、心の健康問題があるかどうか、直感的に分かる。	.190	.435	.131	.050	.050
	［問題解決への支援］	子ども自身が問題の解決ができるように意図して、支援を行っている。	.332	.362	.288	.229	.166
	［問題の予測］	子どもの問題行動が見られる前から問題を予測し、積極的に子どもに働きかけている。	.258	.322	.151	.098	.156
子どもとの関わり	［日頃の様子の把握］	子どもの心のサインを見逃さないようにするために、子どもの日頃の様子を把握するように努めている。	.222	.204	.664	.219	-.076
	［信頼関係］	子どもとの信頼関係を築くようにしている。	.229	.101	.580	.220	.035
	［情報収集］	できるかぎりの情報収集を行った上で、問題の見極め（アセスメント）を行っている。	.274	.189	.318	.265	.224
専門性	［医学的知識］	医学的知識に基づいて、問題の見極め（アセスメント）を行っている。	.146	.198	.253	.695	.037
	［専門書や研究会］	養護教諭としての資質・能力を高めるために、専門書を読んだり、研修会や講演会などに積極的に参加したりしている。	.138	.083	.295	.514	.168
	［養護診断・対応の適切さ］	養護診断・対応が適切であったかどうかについて、評価を行っている。	.274	.212	.084	.411	-.015
独自性	［捉え方の違い］	養護教諭と、担任などの他の教職員による健康問題の捉え方に違いを感じる。	-.088	-.005	-.001	.061	.517

共分散構造分析によるパス解析を行った結果、観測変数 19、潜在変数 4 とした時、適合度指標は、CFI=.921、RMSEA=.057 となり、すべてに 0.1%水準で有意なパスが示された（図 1 参照）。

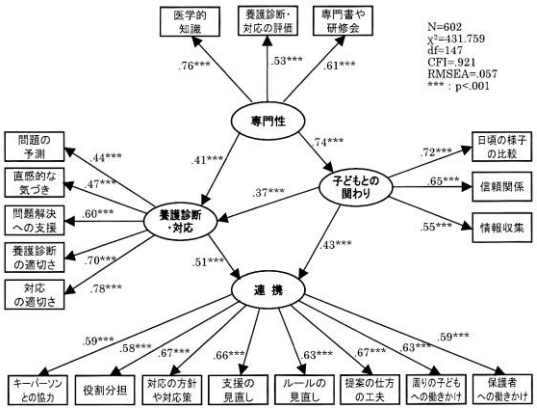

図 1　子どもの心の健康問題への養護診断・対応に対する共分散構造分析

さらに、外部機関や専門家との連携に関する調査では、86%の養護教諭が連携の経験があり、学級担任に次いで養護教諭が連携を図っている場合が多いことが分かった。外部連携先は、医療機関、児童相談所、教育相談機関が多かった（図 2 参照）。

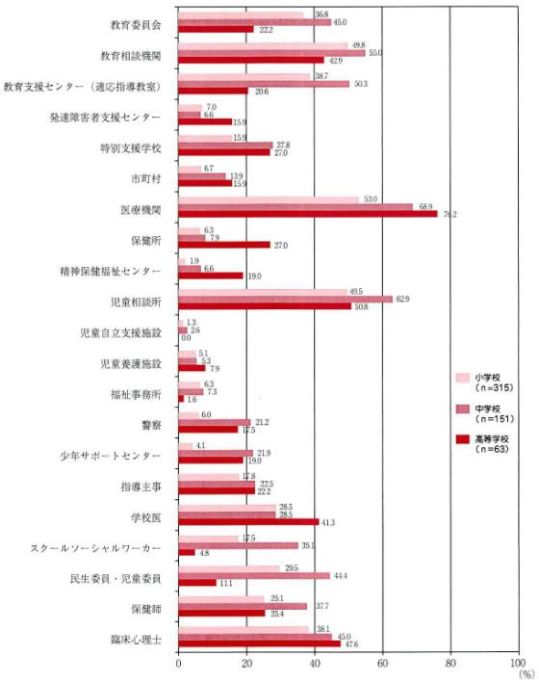

図 2　連携した関係機関や専門家

質問紙調査のすべての対象者に、調査結果と学会での発表資料を郵送し、研究成果を知らせた。

(2)養護教諭、スクールカウンセラー、生徒指導主事を対象とした連携に関する面接調査

平成 24 年 8 月に、心の健康問題で関係機関や専門家と連携した経験のある中学校に勤務する養護教諭 4 名を対象として、子ども

の心の健康課題における連携について面接調査を行った。連携プロセス上で養護教諭がどのような判断をしているのか、4 事例について複線径路・等至性モデル（TEM）を用いて分析した（図 3 参照）。養護教諭は、①危険度・緊急度が高いか、②病的であるか、③校内対応には限界があるか（発達障害や家庭問題など）、段階的に関係機関との連携の必要性の判断をしている。連携の必要性の判断、関係機関に関する情報の提供、関係機関の選定、医療機関との橋渡しなど、専門家やコーディネーターとしての養護教諭の役割が重要であることが分かった。

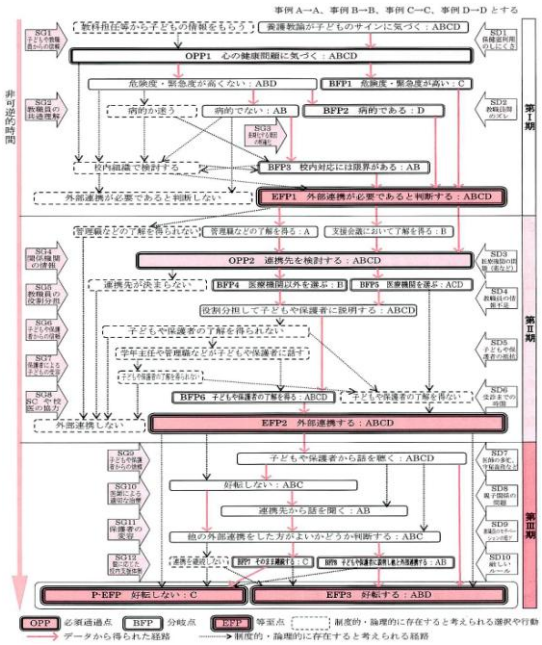

図 3　心の健康問題における養護教諭による外部連携のプロセス

また、平成 25 年 2 月にはスクールカウンセラー、3 月には生徒指導主事への面接を同様に行い、連携した事例について調査し、TEM による分析を行った（図 4 参照）。

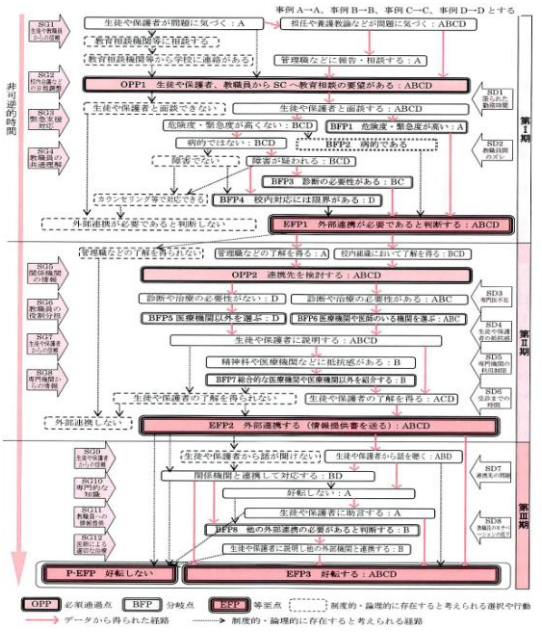

図4　心の健康問題におけるスクールカウンセラーによる外部連携のプロセス

(3)保健室来室者記録の改善

新潟市内の小・中・高等学校に勤務する養護教諭 6 名を対象にしてファシリテーションの手法を用いてグループインタビューを行い、子どもの心の健康問題に気づく視点と保健室来室者記録に入れたい項目についてまとめた（表 3、4 参照）。

表 3　子どもの健康問題に気づく視点

大項目	小項目	主な内容
出席状況	欠席・遅刻	欠席や遅刻が多い生徒の来室・連絡なしの遅刻
	さぼる	トイレなどでサボる・部活に行かない
来室状況	来室理由	早退したがる・帰りたいという
	教室に戻ろうとしない	用事がすんでもずっといる・教室に戻りたがらない
	回数	来室が頻回・急に頻回に来る
	時間帯	同じ教科の時間の前に来る・休み時間になると来る
	一人で来室	一人で来る（いつもと違う）
	来室時の仲間	一緒に来る人がいつもと違う・メンバーが欠ける
	主訴があいまい	訴えがちぐはぐ・訴えがはっきりしない
来室時の様子	表情	暗い表情・顔がこわばっている
	態度	元気がない・落ち着きがない・何も言わない
	感情	泣いて来室する・やけに明るい
アピール		必要以上にアピールする・話しかけられたそうな表情
外観		服装、髪の色が変わる・ピアスやｶﾗｰｺﾝﾀｸﾄを付ける
事前情報		担任や生徒指導部会で情報を得ている
生活習慣		朝食をとってない・寝ていない・メディア依存傾向

表 4　保健室来室者記録に入れたい項目

大項目	入れたい項目	心の健康問題との関連や理由
出席状況	部活動	部活動に関係しての疲労や人間関係などの影響がある
来室目的	来室目的（自己決定）	帰りたい、授業を受けたくないなどの理由から心の問題に気づく
来室状況	来室時間・教科	特定の時間に来室したり、頻回来室したりする子どもを見逃さない
来室時の様子	来室した様子（表情・態度など）	心の健康問題が表情、行動に出る。養護教諭の記載欄があるとよい
アピール	相談したいか	相談のニーズがある場合、相談活動に入りやすい子どもの自己表現にも役立つ
外観	外観 （養護教諭記載欄のメモを増やす）	外観の変化も重要な情報になる 項目ではなく記載できるスペースがあるとよい
生活習慣	メディア・携帯電話使用時間・生活習慣・帰宅時間・帰宅後の生活の様子・食事の状況	生活習慣、特にメディアや携帯電話は体調に影響を与えるだけでなく、精神的にも影響を与えることがある 食事の状況や帰宅後の様子から家庭での生活の様子がうかがえる
その他	どうして具合が悪いか 疲れている理由	子ども自身に原因を考えさせたい 自分の状況を複合的に判断させたい

グループインタビューの結果と養護教諭を対象とした保健室来室者記録に関する質問紙調査の結果に基づいて、養護教諭が心の健康問題に気づくことを視点に入れて、保健室来室者記録を作成した。発達段階や系統性を考慮して小･中･高等学校用を作成し、実際に 6 名の養護教諭から約 1 ヶ月使用してもらい、改善を図った（図 5 参照）。

図 5　保健室来室者記録（中学校編）

(4)関係機関や専門家への連携に関する面接調査

心の健康問題において，関係機関との連携が重要であることから、心の健康問題に関わる関係機関ついての資料を集めるとともに、新潟県及び新潟市内の関係機関に実際に訪問し、面接調査を行った。関係機関は、教育委員会、教育相談所･教育支援センター、警察・少年サポートセンター、児童相談所、福祉事務所、発達障害者支援センター、保健所、精神保健福祉センターなどである。

また、連携におけるキーパーソンとなっているスクールソーシャルワーカー（SSW）4名に面接調査をし、SSWによる小･中学生の問題行動等への支援について、14のカテゴリーと53のサブカテゴリーを抽出し、支援の構造を図6のようにまとめた。学校支援や子どもへの支援、家族支援、医療機関との連携、関係機関・地域との連携は相互に関連し合っており、それら全体がよい方向に向かうようにすることで、子どもの問題の改善が図られている。特に、SSWの支援によって、学校体制や教師の意識が変わることが、非常に大きな効果をもたらすことが明らかになった。

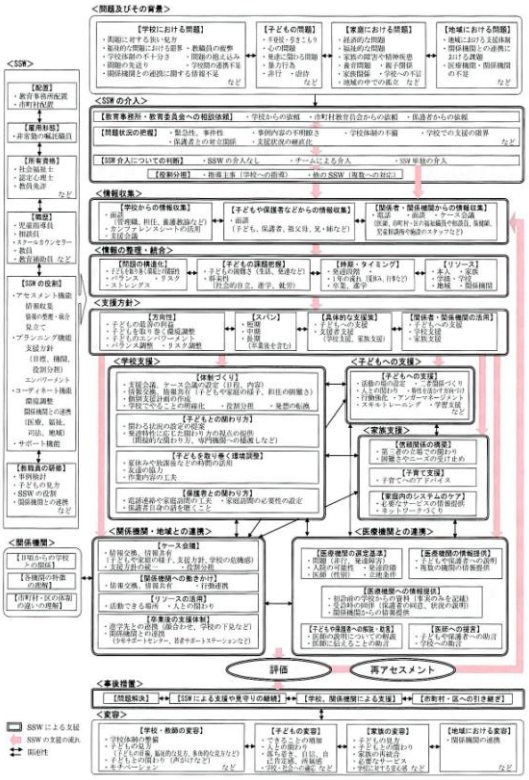

図5　SSWによる小・中学生の問題行動等への支援の構造

(5)健康相談活動の進め方、アセスメント・シート、情報提供書等の作成

質問紙調査や面接調査によって明らかになった知見を基に 、健康相談活動の主な流れ（①問題の予測、②気づき、③危機管理、④フィジカルアセスメント、⑤情報、⑥養護診断、⑦支援計画、⑧支援、⑨事後対応）を図6のようにまとめ、養護教諭が健康相談活動を行う際に大切にしたいことを具体的な事項としてまとめた。ケース会議や連携において活用するためのアセスメント・シート（図7参照）や情報提供書（図8参照）等についても検討し、作成した。

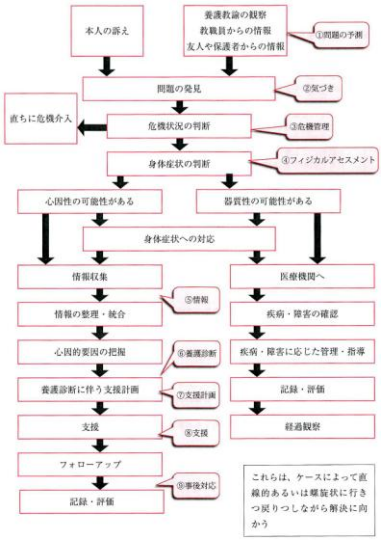

図6　健康相談活動の主な流れ

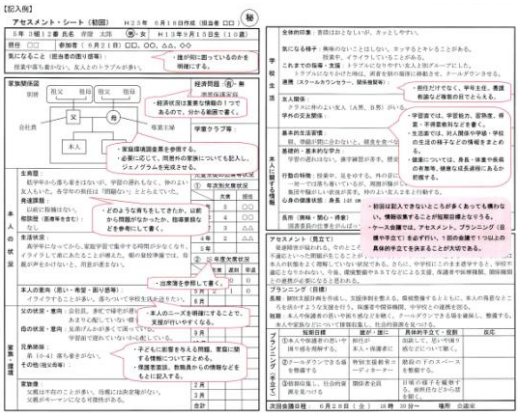

図7　アセスメント･シートの記入例

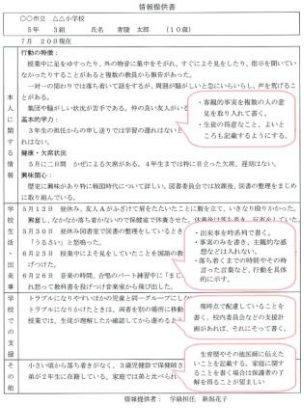

図8　情報提供書の記入例

各関係機関の協力を得て、健康相談活動の進め方、学校における体制づくり、関係機関との連携などについて、これまでの研究成果も含めて、著書としてまとめた。今後、新潟県内の養護教諭及び関係機関に配布する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

① 中村恵子、心の健康問題をもつ子どものサインにどのように対応したらよいか、心とからだの健康、第 15 巻第 10 号、14-18 頁、2011 年。
② 中村恵子・塚原加寿子・伊豆麻子ほか、心の健康問題をもつ養護診断・対応に関する研究、新潟青陵学会誌、第 5 巻第 3 号、1-9 頁、2013 年。
③ 中村恵子・塚原加寿子・伊豆麻子ほか、スクールカウンセラーによる外部機関との連携のプロセスのモデル化、新潟青陵学会誌、第 6 巻第 1 号、47-58 頁、2013 年。
④ 塚原加寿子・中村恵子・伊豆麻子ほか、子どもの問題行動に関する学校と外部機関との連携のプロセスのモデル化―生徒指導主事の面接調査から―、新潟青陵学会誌、第 6 巻第 1 号、59-70 頁、2013 年。
⑤ 佐藤美幸・中村恵子・塚原加寿子ほか、子どもの心の健康問題における学校と外部機関との連携に関する研究、新潟青陵学会誌、第 6 巻第 1 号、71-78 頁、2013 年。
⑥ 伊豆麻子・中村恵子・塚原加寿子ほか、学校における保健室来室者記録の現状に関する調査研究、新潟青陵学会誌、第 6 巻第 1 号、107-115 頁、2013 年。
⑦ 中村恵子・塚原加寿子・伊豆麻子ほか、養護教諭による心の健康問題に関する外部機関との連携プロセスのモデル化、日本養護教諭教育学会誌、第 17 巻第 1 号、23-32 頁、2013 年。
⑧ 石崎トモイ・中村恵子・伊豆麻子ほか、心の健康問題を持つ子どもの養護診断・対応についての研究―中堅養護教諭の対応の技術―、日本養護教諭教育学会誌、第 17 巻第 1 号、57-66 頁、2013 年。
⑨ 中村恵子、心の問題をめぐる関係機関との連携、児童心理、第 67 巻第 14 号、104-109 頁、2013 年。
⑩ 中村恵子・塚原加寿子・伊豆麻子ほか、小・中学校の問題行動等におけるスクールソーシャルワーカーによる支援の効果、新潟青陵学会誌、第 6 巻第 3 号、1-12 頁、2014 年。
⑪ 栗林祐子・中村恵子・塚原加寿子ほか、心の健康問題をもつ子どもの養護診断・対応における養護教諭の所有免許による相違に関する研究、新潟青陵学会誌、第 6 巻第 3 号、13-24 頁、2014 年。

〔学会発表〕（計 4 件）

① 伊豆麻子・中村恵子・石崎トモイほか、子どもの心の健康問題における養護診断・対応に関する調査研究～保健室来室者記録に関する現状と課題～、日本健康相談活動学会第 8 回学術集会、2012 年 2 月、熊本大学（熊本県）。
② 中村恵子・伊豆麻子・石崎トモイほか、子どもの心の健康問題における養護診断・対応に関する調査研究～養護教諭・対応のモデル構築に関する一考察～、日本健康相談活動学会第 8 回学術集会、2012 年 2 月、熊本大学（熊本県）。
③ 中村恵子・伊豆麻子・石崎トモイほか、子どもの心の健康問題における連携に関する研究、第 41 回新潟県学校保健学会、2012 年 12 月、直江津学びの交流館（新潟県）。
④ 中村恵子・塚原加寿子・伊豆麻子ほか、心の健康問題に関する外部機関との連携プロセスにおける養護教諭の役割―複線経路・等至性モデルによる養護教諭の判断についての分析―、日本健康相談活動学会第 9 回学術集会、2013 年 3 月、北翔大学（北海道）。

〔図書〕（計 1 件）

① 石崎トモイ（監修）・中村恵子（編集）、子どもの心の健康問題の理解と対応、ウェストン、2014 年。

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）
○取得状況（計 0 件）

６．研究組織

(1)研究代表者
中村　恵子（NAKAMURA KEIKO）
新潟青陵大学・看護福祉心理学部・教授
研究者番号：10410250

(2)連携研究者
塚原　加寿子（Kazuko Tsukahara）
新潟青陵大学・看護福祉心理学部・准教授
伊豆　麻子（Asako Izu）
新潟青陵大学・看護福祉心理学部・教授
岩崎　保之（Iwasaki Yasuyuki）
新潟青陵大学・看護福祉心理学部・教授
栗林　祐子（Yuko Kuribayashi）
新潟県教育庁下越教育事務所・指導主事
大森　悦子（Etsuko Omori）
新潟市立松浜中学校・養護教諭
佐藤　美幸（Miyuki Sato）
新潟青陵高等学校・養護教諭
渡邉　文美（Ayami Watanabe）
新潟市立白山小学校・養護教諭
石崎 トモイ(Tomoi Ishizaki)
了徳寺大学・非常勤講師